

人々の花への関心と育種の現状

京都大学農学部付属農場

河瀬晃四郎

園芸作物の中でも、花卉生産（花＝草花、卉＝花木）は順調な伸びを示し、今や花卉産業は2兆円レベルを目指すほどになり、全国の切り花出荷量は49億1千万本、球根は4億6千万球（平成2年度花き生産出荷統計 1992 農水省）で、花卉生産高は6000億円に近づこうとしている。国内生産だけではなく海外からの輸入も多くなり、平成3年の切り花は4億4千万本、球根は2億4千万球となっており、切り花、球根ともに5年前の2倍にもなっている（農薬 39. 1992）。このような増加は、国民生活の向上や生活様式の変化にともなう結果と考えられるが、それと同時に常に新しい品種を生み出してきた種苗会社、また篤農家のたゆまぬ努力の結果でもある。このような状況を背景にして行われた興味深いアンケートがあるので、その結果を紹介したい。

数年前から種々のアンケートが試みられ、昨年まとめられたもので、それは『花と人とのかかわりに関する調査研究』（今西 1991）で、今年の3月、その縮小版とも言うべき『花と人とのかかわり』（今西 1992 大阪花の振興協議会）が公にされた。その中から、最近の人々が花に対してどのような関心を寄せているか、また、生花店側と消費者側との意識の違いなどを拾いあげてみたい。これらのアンケートは5および7段階尺度評定法を用いて行い、その結果を度合で示したものである。

①花に何を求めるか。

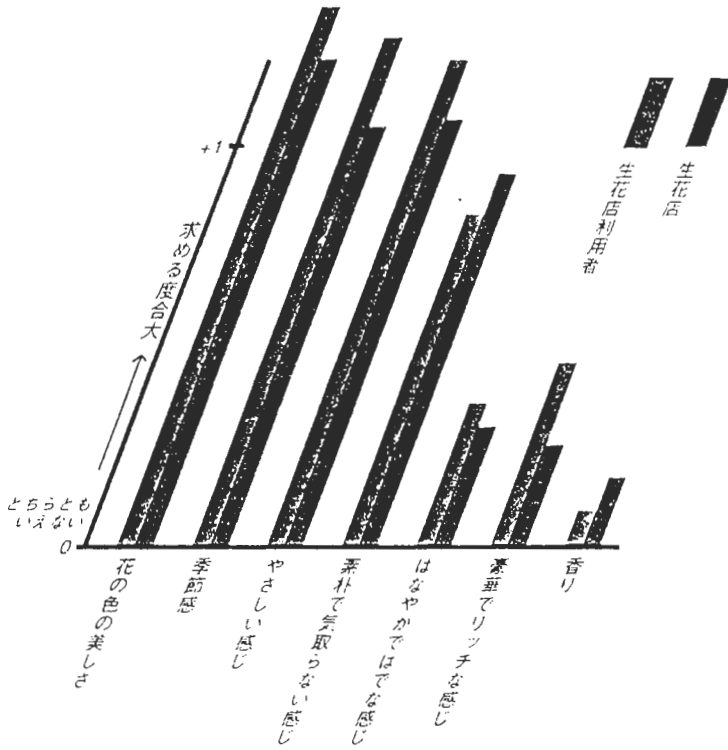
花色の美しさ、季節感、やさしい感じを求める場合が多く、はでな感じとか、香りが求められていない（第1図）。

②どの花色が好まれるか。

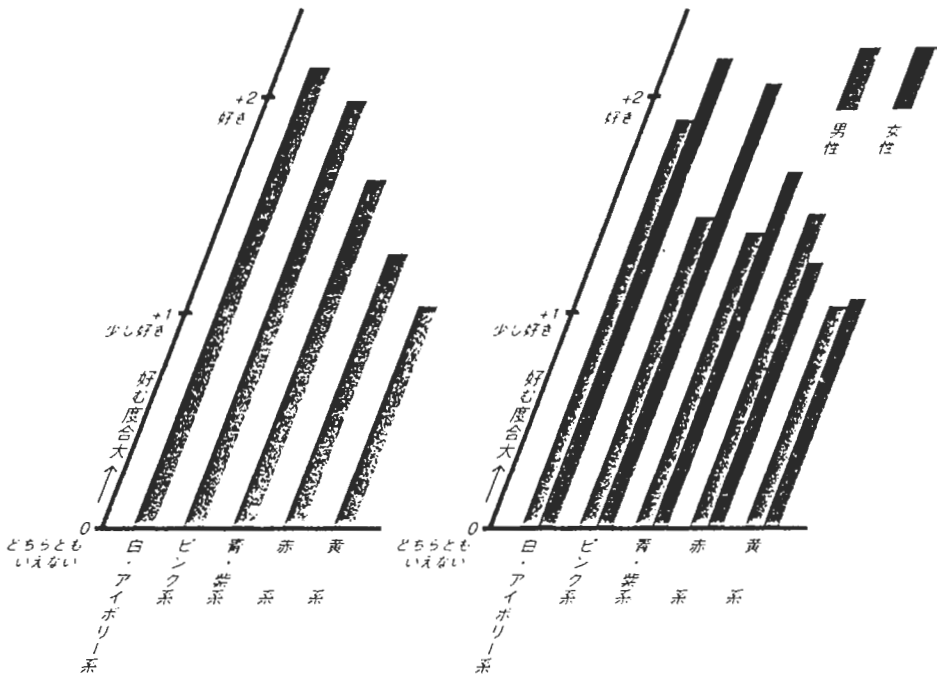
白、アイボリー系、ピンク系の花色が1位および2位を占め、赤系、黄系が好まれていない（第2図）。

③どの種類の花が好きか。

ベスト3はカスミソウ、コスモス、サクラ、次いでバラという順位となっているが、この結果は、野の花が好きか、あるいは手入れの行き届いた花が好きかという質問に対し、野の雰囲気を感じさせる素朴な花を好むという回答が80%以上を占めることからもうなずける。好まれない花としては、ダリア、キク、グラジオラス、アイリス、テッポウユリといった大形の花があげられる。この結果は、男性も女性も同じ傾向である。



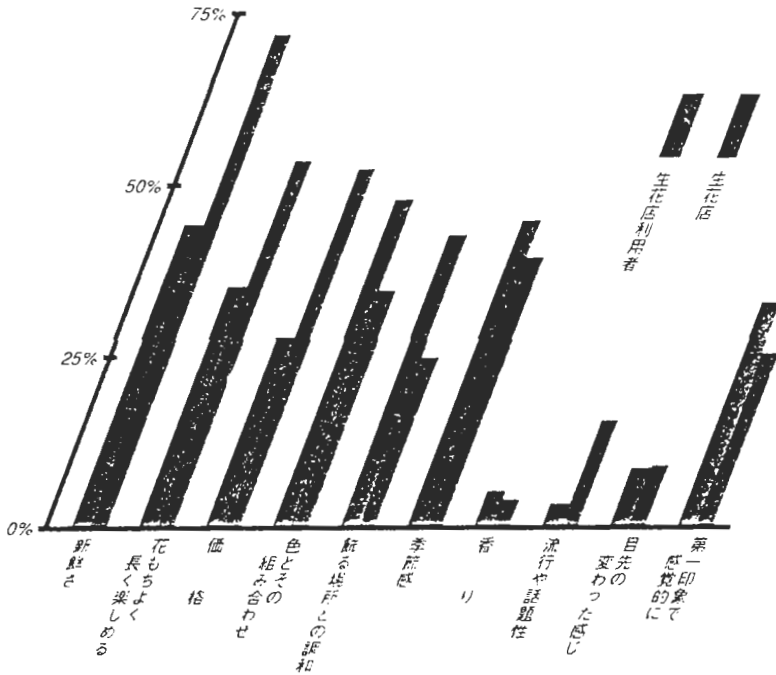
第1図 人が花に求めるものとその度合



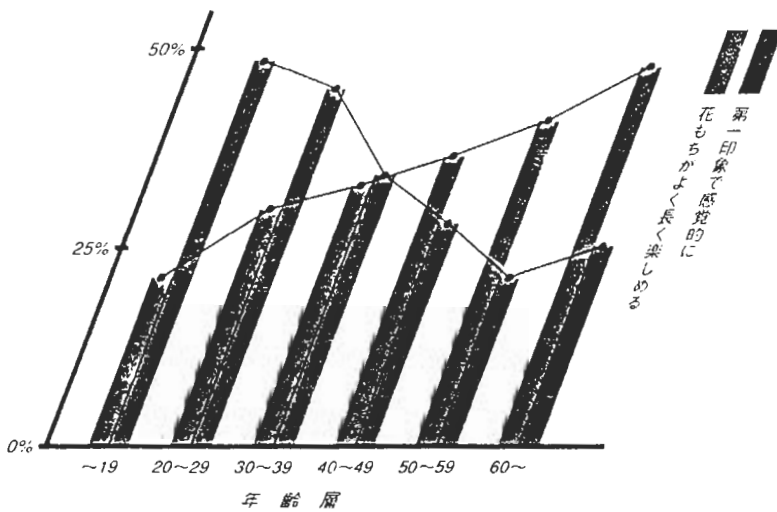
第2図 どの花色がどのくらい好まれているか (全体と男女別)

④買う花を決めるポイントについて。

買うときの目安になる点について、新鮮さ、季節感、色とその組み合わせが50%近い。年齢層別に花もちと感覚的の2項目についてみると、若年齢層は第1印象で感覚的に花を選んでいるのに対し、高年齢層では花もちの良いものを求める傾向が強い(第3、4図)。



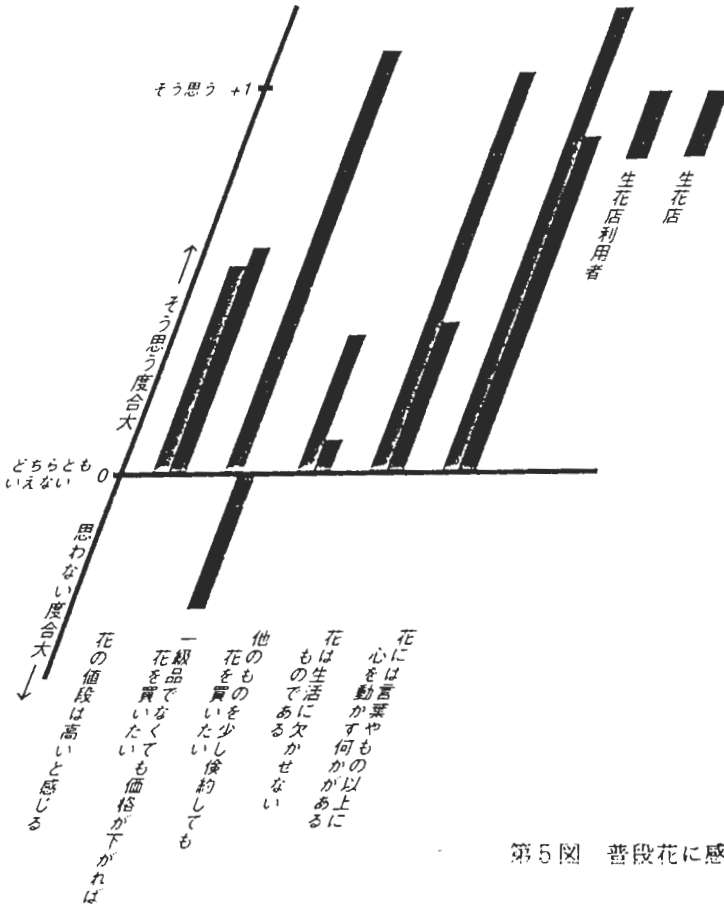
第3図 普段花に感じていること



第4図 花もちがよい、感覚的に、

⑤花に対する感じについて。

花を求める場合、当然のこととして価格が関心事となるが、意外と花の価格を高いと感じていない人が多い。1級品でなくても価格が下がれば、花を買いたい人がかなり多いが、生花店側の意向は全く逆である（第5図）。



第5図 普段花に感じていること

このようなアンケート結果から、淡い色で、花卉の薄い、軽い感じの、小さな可愛らしい、やさしい感じの花（軽薄淡小）が求められており、やすらぎ、やわらかさ、やさしさといった3Yの花である。すなわち、『現代人にとって花は気分を高揚させるためのものではなく、気分を鎮静させる役割に重きがおかれている』といえる。また、自然志向の傾向がうかがわれるが、都市住人の求めるのは単なる自然ではなく、野の雰囲気（霧気）を好むようで、今の住空間に似合う花を求めているようである。このような意識の中にある現代人はチューリップやトルコギキョウあるいはチドリソウを多く買い求めている傾向があるが、これらの花には野の雰囲気、季節感、新しさや珍しさなどが入り混じっており、いろいろな要素が混り合っている『復層的な魅力を放つようなもの』が求められるようである。

価格の点では、高品質の花の価格は認めているものの、それでは度々求めることができず、結局、多少品質が低下しても、手頃な価格の花を求めているようである。

このようなアンケート結果とは別に種苗会社や篤農家により、花の品種改良が行われているが、その品種改良には、花の消費動向がどの程度の影響を及ぼしているのか明らかでない。

草花について、品種改良はある限定された種類についてのみ行われているのが最近の傾向のようで、インパチエンス、ゼラニウム、ペチュニア、パンジー、ピンカがその代表である。従来の個人向け種苗の生産は少なくなり、会社組織による苗生産が主流となってきたため、高性の種類が減少し、逆に花壇向きの矮性の種類が主体となってきている。これにはプラグ苗生産も大きく影響を及ぼしている。これらの種類に加えて、コスモス、ダイアンサス・ハイブリッドなどを加えて、それらの新しい品種は矮性であることは共通であるが、大輪から小輪へ、また逆に小輪から大輪へと改良されている。

花色では、これまでにない花色が加わる傾向がみうけられ、全体にパステル調の花が多くなり、鮮明な花色への改良も努力されている。その他、多花性、耐暑性を求め、現在、夏の花壇材料が不足しているといわれるが、徐々に改良の成果が上がっているようである。矮性種が求められる背景には、流通機構の影響がある。流通の過程で、傷みが少ないことが要求されるため、これは消費者側の意向とは裏腹である。将来的には一層品種の単純化が進むものと推測される。

切り花ではスプレーギクの導入以来、日本的な生け花に代わって、洋風の装飾に合う形態のものが人気を得るようになり、カーネーションも従来の大輪種からスプレータイプになり、今やカタログをみてもスプレータイプの品種が大半を占めるほどになっている。その他、スターチス、カスミソウ、シロクジャクといった種類が急速に広まっている。これとは逆に、コスモス、スマレ、マーガレットといった清楚で可憐な種類にも人気が出ており、より珍しいもの、変わったものといった少量多品目化に向かっている面もうかがわれる。

これらの花色に対する好みも変化しているが、それはシクラメンに始まるといわれている。シクラメンは緋色でなければといった時代は古く、今は淡い色調のパステル系が好まれ、多様な色彩のものが求められ、改良もそれに対応している。シクラメンに限らずストックやスターチスも中間色に人気があり、豊富な花色が揃えられている。トルコギキョウ（ユーストマ）は最近、特に品種改良が進み、従来の紫、濃紫紺のような濃色から、淡色化の方向へ向いており、小輪のスプレータイプあるいは矮性種も出現している。

外国、特にオランダから輸入される品種により国内の生産や消費が刺激される場合もある。その例として、チューリップがあげられるが、キクやランを除いて、カーネーション、バラ、カスミソウ、ユリなど多くの種類は、現在外国品種が主力であるといわれる。これが起爆剤となって、国内での育種が進展することを期待したい。

先の消費者の求める品種特性とカタログにみる品種とは必ずしも一致しないが、花色の変遷は明らかに消費者の意向を反映したものであろう。草花の種類が単純化されるのは好ましい傾向とはいえない。また、花色がパステル調に画一化されるのも好ましくない。ここで問題となるのは、先のアンケートの結果からも分かるように、消費者と生花店の間の意識にかなりの差があること、また、花を買う消費者と花を作る生産者がお互いに見えないこともあげられよう。『花を作る人、花を売る人、花を買う人がそれぞれの立場で相手をよく理解する必要がある』と思われるが、生産、流通、販売、利用といった面での何らかの変革が必要のようである。